



おけと勝山温泉ゆうゆう外観



置戸町

温泉入浴施設「ゆうゆう」を拠点とした観光振興

「トレーラーハウスでアウトドア層の取り込みを」

今回は、置戸町における「おけと勝山温泉ゆうゆう」を拠点とした交流人口拡大に向けた取組を紹介します。

置戸町の現状と課題

オホーツク管内の南西端に位置する置戸町は、林業と農業の盛んな町で、面積の8割を森林が占め、「オケクラフト」と呼ばれる木工芸活動も盛んな地域です。

置戸町では、就業等の場が少ないことから20代前後の若者が大学進学や就職のため札幌市や近隣自治体に転出するなど、他自治体と同様に人口減少や少子高齢化による地域産業の担い手不足などの課題があります。こうした課題への対応のひとつとして「ゆうゆう」を核として町の特徴をいかした産業の振興や人材育成に取り組んでいます。

地域の憩いの場と観光拠点「ゆうゆう」

「おけと勝山温泉ゆうゆう」は、市街地から離れた勝山地区に位置し、近隣にパークゴルフ場や農園が広がる自然豊かな地域で、源泉掛け流しの温泉のほか、レストラン等の休憩施設も充実

した公営の温泉入浴施設として平成6年にオープンして以来、地域住民の交流拠点はもとより、観光拠点として機能してきました。オープン翌年の平成7年には入浴者数が15万人を超え、平成12年に敷地内に掛け流し温泉付きのコテージを設置するなど、町の新たな観光資源として注目されますが、その後は運営母体であった第3セクターの撤退、町内・町外事業者（指定管理者）の撤退が相次ぎ、平成26年には一度、運営休止の危機を迎えます。

しかし、町民の交流の場である「ゆうゆう」の存続を強く願う町内の商工業界をはじめ関係団体代表等町民有志が立ち上がり、「（一般社団法人）おけと勝山温泉ゆうゆう」を指定管理者として設立し、平成29年にリニューアルオープンを迎えることができました。

トレーラーハウスの導入

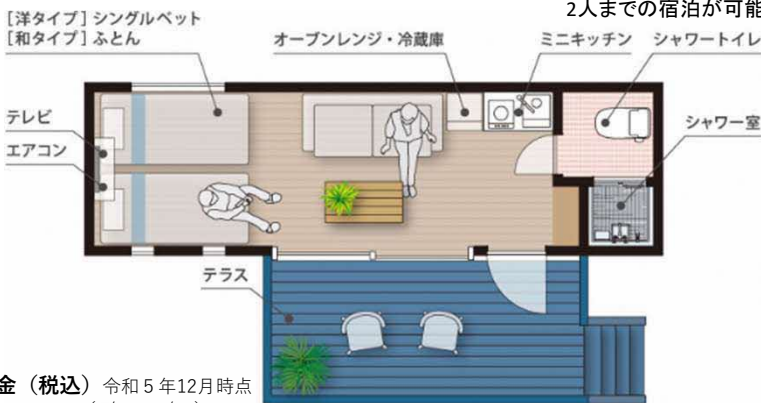
リニューアルオープン後、町民の憩いの場かつ町の観光拠点として、町の地域振興の中心となっていましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を

受け、令和2年度は5万4千人程度まで利用者が落ち込み、コロナ禍による人々の行動変容に適切に対応することが求められました。そのような中でも「ゆうゆ」内に設置されたコテージは、密を避けて温泉を楽しめるということで、コロナ禍でも安定した稼働率を維持していました。こうした人々の行動変容を好機と捉え、令和3年10月、町は国の補助金を活用して、5台のトレーラーハウスを導入しました。新たなトレーラーハウスは、感染者の隔離施設や診療施設として利用できること、災害時に避難所や仮設住宅として活用できることなど、その多様性や導入のしやすさも導入の決め手となりました。置戸町では、アウトドア層や手軽にグランピングを楽しみたいファミリー層を町に呼び込み、温泉入浴施設「ゆうゆ」と一体とした、これまでにない「おもてなし」を提供するため、通常時はトレーラーハウスを「ゆうゆ」敷地内に設置しました。



▶朝食は各トレーラーハウスに運んでもらえる。北見市のフランス料理店「メゾン・ブレイズ」監修の洋食プレートか、「日本の給食」として有名となった町内の元管理栄養士監修の健康朝食から選ぶことができる。

▼トレーラーハウスの展開図。
寒冷地仕様で冬でも快適。
2人までの宿泊が可能。



▲5棟全てに部屋のテーマがあり、インテリアが違う。ベッドタイプと布団タイプがあり、布団タイプは幼児一名の追加宿泊が可能。

○利用料金（税込）令和5年12月時点
夏機関 10,000円（5/1～10/31）
冬期間 8,000円（11/1～4/30）
繁忙期 12,000円（土曜、祝前日、5/2～5/5、7/25～8/20、12/31～1/2）

▼おけと勝山温泉ゆうゆの年間入浴者数、コテージ稼働数及びトレーラーハウス稼働数

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度 (9/30まで)
入浴者数	54,485名	66,715名	76,555名	35,283名
コテージ稼働数 (棟・稼働率) ^(4棟)	1,000棟 (69.6%)	1,135棟 (79.0%)	1,223棟 (85.1%)	564棟 (79.2%)
トレーラーハウス稼働数 (棟・稼働率) ^(5棟)	—	376棟(10/1～) (42.2%)	810棟 (46.1%)	518棟 (60.9%)

新たなアウトドア層の取り込み

トレーラーハウスには、簡易キッチンや食器、寝具、シャワー室が完備されており、夕食にバーベキューの提供やテントの貸し出しなど、手軽にグランピングを楽しめるコースが設けられ、近年のアウトドア人気の高まりに付随し、着実に宿泊実績を伸ばしています。町観光協会が新たに進めているサウナイベントでは、トレーラーハウス全棟を活用し、バレルサウナやサウナカー等を用いた宿泊者向けのイベント等も企画しており、「ゆうゆ」と連携した新しい取組を行う予定です。また、提供する朝食が置戸町の特産品にこだわった朝食をオケクラフトの

器とともに楽しめるなど、SNSを中心に話題となりました。

これらの取組が、感染症の流行により確立された新たな観光スタイルに合致したことにより、令和4年度の「ゆうゆ」入浴者数はリニューアル後最高の7万6千人以上、本年度は9月末時点で3万5千人以上の入浴者数を計上しています。

今後は、町観光協会との連携によるアウトドア層をターゲットとした体験型観光商品の開発やワーケーションによる長期滞在など、関係人口の拡大に向けて様々な活用を検討しています。

「ゆうゆ」に込められた思い

今回お話を伺った町役場産業振興課商工観光係の早坂係長からは「「ゆうゆ」のことをなんとかしないとダメだ」と、色々な方を巻き込んで作り上げていった点は置戸町の特性だと思っています。」と語っていただきました。

また、「町民が集結し、会社を作り、経営するということは、これからの未来の進むべきあり方、地域の在り方ではないか。おけと勝山温泉ゆうゆは、町民の宝であり、町民含め多くの利用する方々にもそう思い続けてほしい」と深川町長が述べられていることを伺い、今後においても、「ゆうゆ」を地域振興に据えたまちづくりに取り組みたいという町の熱い思いが伝わってきました。

『なのみちカフェ』から

～地域創生のヒントを探る～



鶴居村で新たな特産品となったクラフトビール。醸造所は小学校の廃校舎を活用。

釧路編



鶴居村

なのみちカフェ

鈴木知事が、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にご様子をお伝えします。

令和5年8月8日訪問

ブラッスリー・ノット 編

今回まずご紹介するのは、鶴居村にあるクラフトビール醸造所「Brasserie Knot(ブラッスリー・ノット)」です。

ブラッスリー・ノットは、村内にあった旧・茂雪裡(もせつり)小学校の廃校舎を改装し、令和4年8月に開設されました。代表取締役で自ら醸造家でもある植竹大海(うえたけひろみ)さんは、「クラフトビールを地域の文化と結び付け、新たな文化として根付かせたい」という想いで鶴居村に移住されました。

「Knot」は「結び目」という意味で、地域や豊かな自然、訪れる人々との結び目が生まれる場所でありたいとの願いが込められています。現在は、年間約8千リットルが生産されており、醸造されたクラフトビールは、鶴居村のふるさと納税の返礼品としても人気を博しています。

ふるさと納税の返礼品としても人気を博している▼



醸造設備について説明する植竹大海代表(写真右)▲

また、9名いるスタッフも全員が本州からの移住者であり、醸造所には、スタッフとコミュニケーションをとりながら気軽に購入できる直売所を併設するなど、ビールの魅力を通じて、鶴居村との新たな出会いを紡いでいます。「地域の皆さんにも支えていただき、楽しく仕事ができていますので、やって良かったと感じている(植竹代表)」とお話されているのが印象的でした。植竹代表は「醸造アドバイザー」として人材育成のコンサルティング事業も行っており、道内でも個性豊かなクラフトビール醸造所が続々と誕生している中、今後ますますの活躍が期待されます。

当日の知事の言葉から

道内各地域でクラフトビールの取組が盛んになってきており、地元食材とのコラボなど、色々な形で地域の魅力が高まり、地域全体としての活性化に通じる取組だと感じました。

地域で実践し、成功している方の姿が第2、第3の挑戦者に繋がっていくと思うので、今後も様々な機会を通じて、取組や経験を共有いただけたらありがたいです。



▶鶴居村ふるさと納税特設サイトでは、クラフトビールとコラボで地域の食材などもPR

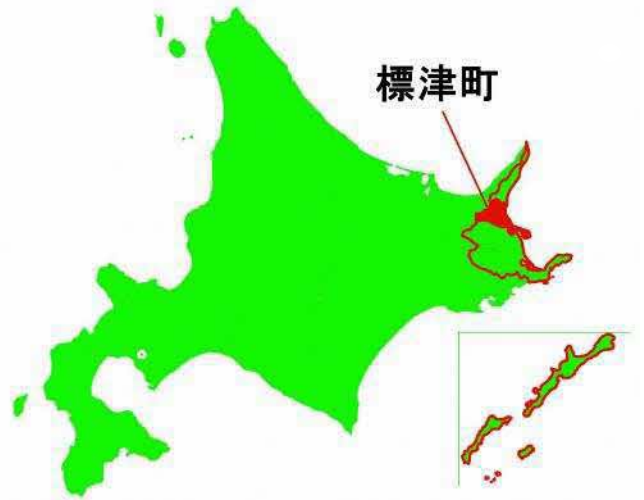


なのみちカフェ(鶴居村)の動画はこちらからご覧いただけます。(YouTubeチャンネル)



▲ポー川史跡自然公園には、一万年の昔から連綿と人の暮らしが続いた古代遺跡と、その周辺の自然環境が一体的に保存されている。

根室編



令和5年9月6日訪問

ポー川史跡自然公園編

次に、標津町にある「ポー川史跡自然公園」についてご紹介します。

「北海道開拓以前の文化的景観を体験・体感できる場所」を「コンセプトとしたこの公園には、日本遺産「『鮭の聖地』の物語」の構成文化財「伊茶仁（いちゃに）カリリウス遺跡」と天然記念物「標津湿原」が国指定文化財として保存されています。

遺跡群に残る竪穴住居跡の窪みの数は約4千4百もあり、国内最大規模を誇るとともに、あらゆる時代の竪穴から多量のサケ科魚類の骨が見つかるなど、約一万年前から、鮭を支えとして人々の暮らしが続いてきたこの地域の豊かな自然環境をうかがい知ることができます。



▲出土品の展示。公園の多様な魅力をより深く体験・体感するため、散策前にビジターセンターの展示を見学するのがお勧め。

標津町では、こうした地域の歴史・文化教育にも力を入れており、

山口将悟町長からは、「カムバツクサーモンのように、子ども達が一度地域を出て行っても、また帰ってくるような教育を進めている」とお話がありました。実際に、最近ではUターンされる方も増え、起業家などとして活躍している若い世代も多いとのこと。

公園内では、湿原木道の散策やカヌーなども用意されており、様々なアクティビティを通じて、雄大な自然や歴史を体感することができます。また、日本遺産を巡るツアーなど、根室海峡沿岸1市3町が連携し、日本遺産を活用した地域振興を図る取組も進められています。アドベンチャートラベルが注目を集める中、今後の取組がますます期待されます。



▲竪穴住居跡の窪み。およそ一万年前からほぼ途切れることなく、人々がこの地に暮らし続けてきた。

当日の知事の言葉から

子どもの頃に、地域の歴史や一万年も続いたストーリーについて学習機会を得たことが、郷土愛やまちの誇りに繋がっており、実際に町に戻って来るといっては、素晴らしいことだと感じました。実際に見て触れて、今なお、鮭が人々の営みを支えていることに、想いを馳せる大切な時間を過ごすことができました。

▶公園内ではカヌーをはじめ、様々なアクティビティが体験できます。



なおみちカフェ（標津町編）の動画はこちらからご覧いただけます。
(YouTubeチャンネル)

